

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月1日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520421

研究課題名（和文）同時バイリンガル幼児の言語発達研究

研究課題名（英文）Research on Language Development of a Simultaneous Bilingual Child

## 研究代表者

山本 雅代（YAMAMOTO MASAYO）

関西学院大学・国際学部・教授

研究者番号：40230586

研究成果の概要（和文）：産出能力が言語間で極端に不均衡な受容バイリンガルが行う言語混合の特徴や機能を、①言語混合要素の類別、②言語混合の文法的適正、③劣勢言語の語彙拡張を促進する機能の有無を課題に考察した。その結果、①では大半が名詞等活用しない形態素であることがわかったが、②と③では統計的検証を可能にする量のデータが得られず、更なるデータ集積を待つこととなった。産出量寡少の受容バイリンガルの研究では避け難い課題と言える。

研究成果の概要（英文）：This research study investigates some characteristics and functions of code-switching, produced by a receptive bilingual child whose productive abilities in the given two languages differ greatly. The investigation is conducted on three research questions: ① what items are most likely to be code-switched, ② how grammatical code-switching is, and ③ whether code-switching has a function that enhances vocabulary expansion in the non-dominant language. The analysis of the available data reveals that ① most of the switched items were non-conjugated morphemes, such as nouns. Due to the scarcity of the available data, however, a fruitful analysis of ② and ③ is not yet possible and awaits the accumulation of sufficient data. This is an unavoidable problem in the study of receptive bilinguals, whose productive data are by definition scarce.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：言語学、バイリンガリズム、同時バイリンガル、受容バイリンガル、言語混合、言語習得/発達

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで長年にわたり、国

内また国外に在住する国際結婚家族を対象に、そこで生育する同時バイリンガルの言語習得の背景となる、家族の言語使用状況を調査、分析してきた。それら一連の研究から、実際にこうした家族の言語使用状況は必ずしも2言語間で均等ではないこと、同時バイリンガル自身の言語使用の度合いも言語間で異なり、多くの場合、当該社会における主流言語がいま一方の非主流言語に勝る傾向が強い、すなわち2言語の能力間に優勢、劣勢の関係が生じやすいことを見出した。

一般に、「バイリンガル」とは2つの言語を話す人と解釈されることが多いが、上記のように現実には2言語の言語能力の間に優劣が生じることが多く、とりわけ産出能力の間にその差が甚だしい場合には、その「バイリンガル」は「受容バイリンガル」と称される。

幼少から2つの言語との接触を持ちながら成長する子どもの中にも、受容バイリンガルとして成長する者は少なくない(30%前後)ことが、先行研究(Billings, 1990; Shang, 1997; Noguchi, 2001)で報告されている。それにもかかわらず、この受容バイリンガルについて我々が知る場所は少ない。

そのような状況のもと、研究代表者はハワイ在住の英語-日本語国際結婚家族の協力を得て、2008年4月より受容バイリンガルに分類されるであろう英語-日本語同時バイリンガル幼児の言語使用の実態を見出すために、この幼児と、幼児との対話に努めて日本語を使用しようとしている母親との間の会話を採録し始めた。そして採録した音声データを予備的に分析したところ、幼児の発話に言語混合が思いの外頻繁に使用されていること、とりわけ劣勢言語(日本語)からの語が優勢言語(英語)による発話に混入するケースが少なくないという興味深い結果を見出した。このような、劣勢言語からの優勢言語への言語要素の混入では、言語混合が、言語習得過程で頻繁に見られる語彙の不足を補う「穴埋め」の機能(一方の言語で未習得の語を他方の言語の既得の語で補う機能)を担っていると考えるのは難しい。では、一体なぜ幼児はそのような、言わば不要な言語混合を行うのか?そこには別の何らかの機能があることが推測される。

言語習得における言語混合の機能、とりわけ劣勢言語から優勢言語への言語混入の機能の解明を通じて、同時バイリンガルの劣勢

言語習得の過程の一端を明らかにしたいと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、受容バイリンガル幼児の言語混合にどのような特徴があり、またそれが幼児の言語発達にいかなる機能を果たしているのかを考察することである。より具体的には、

① 言語混合要素の類別: まず、どのような言語要素(たとえば、名詞、動詞)が混入されるのか、混入される言語要素の品詞類別を明らかにする。

② 言語混合の文法的適正: 言語混合が生起する言語環境を分析し、劣勢言語の言語要素が、優勢言語の文法規則(統語論)に従った適切な位置に、また適切な形態(形態論)で混入されるのか否かを明らかにする。

③ 言語混合の機能: 劣勢言語から優勢言語への言語要素の混入に、優勢言語から劣勢言語への言語要素の混入で言われる「穴埋め」機能を見出しにくい中、なぜ前者のようなタイプの言語混合が生起するのか。その機能は何なのか。既習の優勢言語の語の代わりに、未だ十分定着していない劣勢言語からの語を混入させ、語相互の等交換性の確認を行うことで、劣勢言語の語彙拡大を図る、そうした目的のための確認機能が、このタイプの言語混合にはあるのではないかと考え、その可能性を探る。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究の対象

本研究の対象者はハワイ在住の英語-日本語(受容)バイリンガル幼児で、研究開始時には3歳であったが、現在は7歳の小学校1年生である。

### (2) 研究方法

① 研究の方法はケーススタディで、この幼児とその母親(日本語を母語とする日本語-英語のバイリンガル)との対話を長期にわたり定期的に採録し、これを分析データとした。対話の採録は、科研費による本研究の開始1年前の2008年4月に開始し、研究期間最終年度となる2011年度末まで、4年にわたり月1回の頻度で行ない、計45回分のデータを得た(ただし諸般の事情から未採録の月が3ヶ月ある)。加えて、時間の経過に伴う言語

環境や言語使用の変化を捉えるために、母親（とバイリンガル女兒）との面談調査も研究期間を通して計5回実施した。

② 分析には3ヶ月ごと（#1, 4, 7, 10, 13, 16, 19, 22, 25, 28, 31, 34, 37, 40, 43）の対話データを用いた。分析の対象としたデータの総録音時間は8時間46分3秒である。

#### 4. 研究成果

##### (1) 分析結果と考察

本研究では、産出能力が極端に不均衡な受容バイリンガル幼児の言語発達に言語混合がどのような機能を果たしているのかを探ることを目的として、4年にわたる女兒と母親との対話データを分析した。

分析は、言語混合のうち、基盤となる言語（以後、基盤言語）が明瞭で、文の中で言語が切り替わる「文中コードスイッチング」（n=107）に限定して行った。

上述の3つの具体的な研究課題の結果を見ていく前に、まずは、どちらの言語（基盤言語）にどちらの言語の言語要素が混入するケースが多いのか、すなわち英語を基盤言語とし、日本語を埋め込み言語（混入する言語要素が属する言語のこと）とする言語混合と、その逆の日本語を基盤言語とし、英語を埋め込み言語とする言語混合とではどちらが多いのかをみてみると、前者が59件（55.1%）、後者が48件（44.9%）であった（両側検定  $p=0.3337$ ）。すなわち、この女兒のケースでは、産出能力の優劣とどちらの言語が他言語からの混入を受けやすいかということの間には有意な関係が見られなかったということになる。しかしながら、ここで分析に用いた言語混合文は、基盤言語が明瞭なものに限定しており、それがこの結果に影響を及ぼした可能性もあるため、有意差がなかったことの意味の解釈には注意を要する。

では、3つの課題について、その分析結果を略述の上、考察していきたい。

① 言語混合要素の類別：分析の結果（表1）、基盤言語が日本語、英語のいずれであっても、混入する言語要素としては、名詞類（ここでは、名詞、固有名詞、名詞句を便宜的にこう呼ぶ）が最も多いことがわかった。基盤言語が日本語では名詞類は37件（77.1%）で、内訳は名詞17件（35.4%）、固有名詞11件（22.9%）、名詞句9件（18.8%）で、基盤言語が英語の場合には、名詞類は34件（57.6%）

で、内訳はそれぞれ23件（39.0%）、9件（15.3%）、2件（3.4%）であった（ $\chi^2=5.437$ ,  $df=2$ ,  $.05 < p < .10$ ）。

また両者に共通する別の特徴として、動詞の混入が、いずれの場合にもほとんど見られなかったこと、すなわち基盤言語が日本語の場合には皆無、基盤言語が英語の場合でもわずか1件（1.7%）しか見られなかったことをあげることができる。

一方、両者の違いとして顕著だったのは、指示代名詞の使用頻度である。英語が基盤言語の場合、日本語の指示代名詞が混入されるケースが7件（11.9%）見られたのに対し、日本語が基盤言語の場合には英語の指示代名詞が混入されるケースは皆無であった。

表1 言語混合要素の類別（ ）内は%

品詞	基盤言語（日本語） 混入要素（英語）	基盤言語（英語） 混入要素（日本語）
名詞	17 (35.4)	23 (39.0)
固有名詞	11 (22.9)	9 (15.3)
名詞句	9 (18.8)	2 (3.4)
形容詞	3 (6.3)	7 (11.9)
形容詞句	1 (2.1)	-
動詞	-	1 (1.7)
副詞句	2 (4.2)	-
指示代名詞	-	7 (11.9)
間投詞	1 (2.1)	4 (6.8)
数詞	-	1 (1.7)
終助詞	-	1 (1.7)
固有名詞…名詞	3 (6.3)	-
間投詞…名詞	-	1 (1.7)
間投詞…終助詞	-	1 (1.7)
接続詞…名詞	-	1 (1.7)
従属節	1 (2.1)	1 (1.7)
N=107	48 (44.9)	59 (55.1)

近年の言語混合の研究における理論的枠組み、たとえば、Myers-Scotton & Jake (2001) の4M理論や MacSwan (1999) のミニマリスト・アプローチなどからみれば、混入される言語要素を品詞で分類することで得られる知見はあまり多くはないと思われる。

しかしながら、語彙発達と言語混合との間には密接な関係があることは、改めて実証の必要もないほど明らかであり、そのことは、たとえば、言語混合には「穴埋め」という補償的機能があるとの主張が広く支持されていることに示されていると言って過言ではなからう。

こうした関係を勘案すれば、言語混合の研究に語彙発達研究からの知見が寄与するところは少なくないと考えられる。たとえば、語彙発達の研究では、言語ごとに子どもの習得する語彙に名詞が多いか、動詞が多いか、いわゆる名詞優位か動詞優位の議論があり、先行研究では日本語（小椋 1999, 2007）、英語（Gentner, 1982）共に名詞優位であることが示されている。これらの結果に従えば、日本語、英語のいずれが基盤言語であっても混入言語要素として名詞が多く、動詞が少ない（ほぼ皆無）という今回の分析結果が説明されることになる。

一方、先行研究では、両言語の語彙発達には差異があることも報告されており、たとえば、総語彙に占める名詞の割合が英語の方が日本語の場合よりも高いこと、また日本語については、文法の発達に伴い名詞優位が動詞優位に転換することが指摘されている（小椋 1999, 2007）。

本研究は、言語混合を語彙発達との関係から詳細に分析、考察することを目的としているものではないため、ここではこれ以上立ち入らないが、たとえば、日本語の語彙については、もし文法の発達に従い、動詞の習得が名詞を凌ぐようになる（動詞優位）とするならば、英語を基盤言語とする文中への動詞混入の増加を以て、あるいは混入される動詞の文法的適正の度合いを見ることで、日本語の文法の全体的な発達を推し量ることが可能になるかもしれない。今後の興味深い研究課題として指摘しておきたい。

② 言語混合の文法的適正：英語を基盤言語、日本語を埋め込み言語とする場合には、挿入される言語要素の大半が活用しない単一の形態素であり、文法的適正を検証するためのデータが寡少であったが、分析で検知された例の一つを示せば、本来なら名詞句 NP が埋め込まれるはずの位置に名詞を伴わずに形容詞だけが現れるケースがある。

“I like the おっきい” (#4/34)

しかしながら、これは文法的適正の問題ではなく、語彙の不足から、続くべき名詞の産出が頓挫したものとも考えられ、今後の更なるデータの集積を待って、改めて考察したい。

③ 劣勢言語の語彙拡張のための語相互の等交換性の確認機能：そこに等交換性が見られ

ると判断するための一つの要件として、言語を跨いだ同義語としての「異言語間同義語」（一方の言語で発話された語句と同義語と見なされる他方の言語の語句のこと）の存在と、それが同一発話ないしは関連する一連の後続発話の中で使用されていることを求めるとするならば、その要件を充たす以下のような例が検出されている。

女兒：I like the big one

母：おっきいほうがいいの？

女兒：Yeah

母：うん

女兒：I like the おっきい

(#4/32~34)

しかしながら、こちらについてもデータが寡少のため、逸話の範囲に留まっており、今後の名詞、動詞、形容詞、副詞などの典型的な内容語の発達をにらみながら検証していかなければならない。

以上の研究結果をまとめると、言語混合要素の類別については、データ量は少ないながらも、混合要素について、ある程度の特徴を見出すことができたこと、また語彙の発達研究からの知見と言語混合研究からの知見とを併せ考察することで、子どもの言語発達の進展についての理解がより深まる可能性があることが示された。

その一方で、言語混合の文法的適正や劣勢言語の語彙拡張のための語相互の等交換性の確認機能については、繰り返し述べるように分析に必要なデータが十分でなく、それらしき個別の事例は観察されたものの、統計的検証ができるだけの十分な事例は検出されず、逸話的なレベルに留まった。言語間の産出量の違いが大きい受容バイリンガルを対象とした研究では避け難い課題と言える。

## (2) 今後の課題

① 問題点：いくつかあるが、ここではその内、最も改善が困難な、研究方法論上の問題点の一つ挙げておきたい。

本研究では、研究対象者が海外在住で、研究代表者が国内在住のため、毎月定期的に当地に赴くことができない。よって、データの定期的収集には、母親の協力を得て、母親とバイリンガル女兒との会話を母親が録音し、それを研究代表者に送付するという方法を

採用している。そのため、研究代表者がデータの分析をする際に、会話の文脈に関する十分な情報がないために、発話の解釈に困難を覚えることも少なくない。曖昧なものは分析の対象から外さざるをえないため、多くの貴重なデータが分析されないままに捨て置かれている可能性がある。

地理的な問題の改善は困難であるため、データをより多く、より長期に収集し、分析しうるデータ量を増やすという方法で対処したいと考えている。

② 新たに取り組むべき課題：バイリンガルの言語習得（発達）の過程をより深く理解するために、さらに取り組むべき課題は多いが、その一つとして、まずは本研究の対象者のような受容バイリンガルの劣勢言語の特徴を、とりわけ発話の量的・質的特徴を明らかにする必要があることを指摘したい。

発話を開始した子どもの言語研究では、産出能力の表出としての発話の分析が中心となるため、受容バイリンガルの言語、とりわけ発話が寡少とされる劣勢言語の発達に関する研究は、国内はもとより、バイリンガルの言語習得（発達）研究が、日本に比して格段に活発な欧米諸国にあっても少なく、知見の蓄積も実に心許ない。受容バイリンガルの劣勢言語の発話は、あっても寡少と言われるが、どの程度寡少なのか、単に量的に寡少だけなのか、質的にはどうなのか、発話の言語構造には何か特徴的なものがみられるのかなど、明らかにすべきことは多い。

本研究を進める中で、一方の言語の産出量が寡少であることを特徴とする受容バイリンガルが、実際にどの程度寡少なのか、興味深い分析結果を得た。結果を簡潔に述べれば、劣勢言語においても、思いの外、産出がなされているということであった。

図1はバイリンガル女兒と母親との間でどの言語が使用されているのか、母親の発話とそれに続くバイリンガル女兒の発話を1つの対話単位として、二人の言語使用状況を数値化したものである。

I (E) は両者が英語を、II (J) は両者が日本語を、III-IV (CLD) は両者の使用言語が一致しないもの（例 母親が日本語、バイリンガル女兒が英語という組み合わせ）、V-IX (BD) は少なくとも一方が2つの言語を使用する場合を示している。この表から、劣勢言語である日本語が比較的頻繁に用いられて

いる（たとえばII）ことが見てとれる。

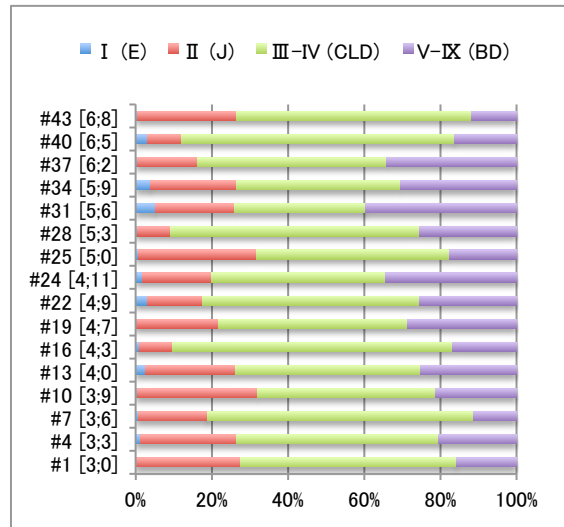


図1 バイリンガル児-母親の言語使用形態

この課題は、今後、継続して進めていく平成24年度～26年度の科研費による研究で取り上げる予定である。

(参考文献)

Billings, M. (1990). Some factors affecting the bilingual development of bicultural children in Japan. *AFW Journal*, April, 93-108.

Gentner, D. (1982). Why nouns are learned before verbs: Linguistic relativity versus natural partitioning. In S. A. Kuczaj (Ed.), *Language development, Vol. 2*. (pp. 301-334). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

MacSwan, J. (1999). *A minimalist approach to intrasentential code switching*. NY: Garland.

Myers-Scotton, C., & Jake, J. L. (2001). Explaining aspects of code-switching and their implications. In J. L. Nicol (Ed.), *One mind, two languages: Bilingual language processing* (pp. 84-116). Malden, MA: Blackwell.

Noguchi, M. G. (2001). Bilingualism and bicultural children in Japan: A pilot survey of factors linked to active English-Japanese bilingualism. In M. G. Noguchi & S. Fotos (Eds.), *Studies in Japanese bilingualism* (pp. 234-271). Clevedon: Multilingual Matters.

小椋たみこ (1999). 「語彙獲得の日米比較」. 桐谷滋 (編)『ことばと心の発達 第2巻 ことばの獲得』 (pp. 143-194). 京都: ミネルヴァ書房.

小椋たみこ (2007). 「日本の子どもの初期

の語彙発達』『言語研究』第132巻. 29-53.  
Shang, S. (1997). Raising bilingual/  
bicultural children in Kyushu: A survey.  
*Research Bulletin of Kagoshima Women's  
College*, 18(2), 43-58.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 山本雅代、バイリンガル幼児-「受容バイ  
リンガル」はどのように言語を使用している  
か、日本語学、査読無、29巻、2010、170-182

[学会発表] (計6件)

① 山本雅代、受容バイリンガル:「話す」こ  
とはバイリンガルの必要条件か、大阪女学院  
大学国際共生研究所主催招待講演会、2012年  
2月27日、大阪:大阪女学院大学

② YAMAMOTO Masayo, Bilingual  
communication: How a receptive bilingual  
child uses her languages, 2011 Hawaii  
International Conference on Social  
Sciences, 2011, 6, 1, Hawaii, USA: Honolulu

③ 山本雅代、私たちはなぜ「第1言語として  
のバイリンガリズム」を研究するのか?、第  
1言語としてのバイリンガリズム研究会第4  
回研究会、2011年5月14日、京都:キャンパ  
スプラザ京都

④ 山本雅代、第1言語としてのバイリンガ  
リズム-2つの言語を同時に習得する子ども  
たち、同志社大学大学院文学研究科・英文  
学・英語学専攻大学院コロキウム、2010年5  
月8日、京都:同志社大学

⑤ 山本雅代、日本でバイリンガルを育てる  
には、フェリス女学院大学・英文学会 フェ  
リス女学院大学、2009年11月12日、横浜:フ  
ェリス女学院大学

⑥ 山本雅代、バイリンガルの言語習得・使  
用:マクロ、ミクロの両視点から、第1言語  
としてのバイリンガリズム研究会、2009年  
10月18日、大阪:関西学院大学梅田キャン  
パス

[図書] (計1件)

① 山本雅代、朝倉書店、バイリンガリズム-  
モノリンガルの視点からの脱却、西原鈴子  
(編著)『言語と社会・教育』、2010、193-212

[その他]

① YAMAMOTO Masayo, James Swan, Co-edited,  
Special issue on Bilingualism as a First  
Language in Japan, *International Journal  
of Bilingual Education and Bilingualism*,  
2012

② YAMAMOTO Masayo, James Swan,  
Co-authored, Editors' Introduction to  
This Special Issue, *International Journal  
of Bilingual Education and Bilingualism*,  
2012

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

山本 雅代 (YAMAMOTO MASAYO)  
関西学院大学・国際学部・教授  
研究者番号: 40230586

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号: